

「神さまの摂理に生きる」

～ 自分に勝たなければ！！ ～

創世記45：3～9

■ はじめに

神さまの行われることは、はかり知れません。でも、私たちは今しか見られないので、この神さまの働きを今の感情で壊してしまいます。これが怖いことなのです。「あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている（マルコ 8:33）」はイエスさまがペテロに言った言葉です。このことを私たちはよく行っています。神さまが恵みをもって私たちに応えてくださった…奇蹟を起こしてくださったにもかかわらず、すっかりそんなこと忘れて「私が〇〇したから」「私が××だったから」などと、のど元過ぎれば熱さ忘れて、挙げ句の果てには「△△がたりない」「私ばかり〇〇だ」と神さまに対して文句を言い始める…感謝を忘れると言うことは恐ろしいことです。「主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな（詩篇 103:2）感謝が出来ないと不満で一杯になります。不満で一杯になると他人との比較が始まります。そして比較から憎しみと嫉妬が生まれます。この憎しみと嫉妬は怒りを生みます。そしてその怒りが私たちを死に至らせるのです。ですから、私たちはいつも神さまと共にあって喜びで満ちていなければいけません。その喜びで満ちる秘訣は「主の良くしてくださったことを何一つ忘れない」なのです。ダビデは壮絶な人生の中で詩篇のような賛美が出来た理由はただ1つ！「幸いなことよ。悪者のはかりごとによらず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかった、その人。まことに、その人は【主】のおしえを喜びとし、昼も夜もおしえを口ずさむ。（詩篇 1:1-2）」でした。ヨセフは父ヤコブから愛されてきました。兄たちは嫉妬してヨセフを穴に落とし、最終的に奴隷としてエジプトに売られました。しかしヨセフは奴隷としてではなく大臣の下で会計を任されていました。信用されていたのです。しかし、大臣の妻の策略によって罪に問われ牢に入れられることになるのですが、大臣はヨセフを愛していたので王の牢に入れられていたのです。そして、王の夢を解き明かすことによりエジプトの大臣にまでなるのです。その後、ヨセフは自分を穴に落とした兄たちと対面しますが、恨み節の1つもなく、「私をここに遣わしたは、あなたがたではなく、実に、神なのです。」と言ったのです。また、ダニエルもヨセフと同様に異国の王に愛されるのです。ダニエルは王からベルテシャザルと王の国の名前まで与えられていました。そして王に仕えながらも自分たちの神さまに対する忠誠からの行い（野菜しか食べない・お酒は飲まない）を続けていました。貫くところはとことん貫いていましたが、それでも嫌われることがなかったのです。では、私たちはどうでしょう。「自分はクリスチャンなんで〇〇できません…」などと言って「あの人変な人ね」と言われている人たちが現実によくさんいます。私たちクリスチャンが神さまを知らない人たちと比べて「私たちは聖い。あの人たちは汚れている。だから関わらない」という意識を持ちたりしていないでしょうか。本当にこれは神様の御心になったことなのでしょう。聖さを保つてもこれではバランスをいかないとと言えるのではないのでしょうか。聖さを保つ行動をとるには「何のためか」が必要です。ヨセフもダニエルも常に「なぜ、今自分はこの境遇におかれているのか」を考えていました。私たちは考えているのでしょうか。このことを踏まえながら以下を見ていきましょう！

■ 世々にわたる祝福される法則パート3 己に勝つ

ジョン万次郎という人…

天保12年、手伝いで漁に出て嵐に遭い、漁師仲間4人と共に遭難、5日半の漂流後奇跡的に伊豆諸島の無人島に漂着し143日間生活しました。そこでアメリカの捕鯨船ジョン・ハウランド号に仲間と共に救助されます。日本はその頃鎖国していたため、漂流者のうち年配の者達は寄港先のハワイで降ろされますが、船長のホイットフィールドに気に入られた中浜万次郎は本人の希望からそのまま一緒に航海に出ます。多くの日本人が救助された中、なぜ万次郎だけがこのような待遇を受けたのでしょうか？143日間も無人島で不自由な生活を苦しみや痛みを知っていたので、救助された時万次郎は心から感謝していたのでしょうか。その万次郎の人格や行動が船長の心を動かしたと言えるのではないのでしょうか。同年、アメリカ本土に渡った中浜万次郎は、ホイットフィールド船長の養子となって一緒に暮らし、彼は寝る間を惜しんで熱心に勉強し、首席となりました。そして神様を信じるものとなりました。彼はアメリカで、多くのことを学びましたが、たくさんの人種差別にもあいました。しかし、万次郎はそのような苦難も乗り越えました。万次郎は神様を愛し船長に感謝し愛し、だからこそ船長にも愛され続けたのです。そのアメリカでの生活を終え、帰国しますがスパイと疑われ投獄されたりしますが、鎖国の日本に渡来人が来たとき英語ができた万次郎が通訳しました。その時その場には新島襄や後に岩倉使節団として活躍するよう人々も居合わせました。そしてそのことがきっかけで後にペルー来航の際にも通訳を任せられ万次郎の働きのゆえに戦争を免れ外交の道が開かれていくのです。そして、日米修好通商条約の通訳者として渡米し活躍するのです。その万次郎の姿を通して新島襄や坂本龍馬など後の時代の変化に大きな影響を与えた人たちに強い影響を与える人物となりました。ヨセフもダニエルもそうです。みんな苦しい境遇にありました。でも、そんな時必ず助け手が与えられていました。しかし助け手がどうしてその人たちを助けたのか。それは神様がただ助け手を与えただけでなく、その人の中に「造りかえられた姿」を見たからです。人生は出会いです。その出会いは大切です。人に出会った時、その人がたとえどんなに嫌な人でもその人を

大事に出来ないのであれば、その人は自分の窮地に助け手とはなれないのです。ヨセフもダニエルも万次郎も、異国の人とは考え方も何もかもが違ったと思います。もちろん先に挙げた人たちも貫くべきところは妥協せず貫きました。それでも、それ以外のところで愛されたのです。それがすごいのです。自分たちはどうでしょう。教会以外の場所で愛されているでしょうか。

■ ① 出合いを大切に！！ 人格者に。

教会は存在する理由はこれです。人はそれぞれに違った価値観をもっています。それを聖書の価値観に戻すために教会があります。「あなたがいるかわ私は変わる」「あなたがいないければ変わらない」です。これは教会の中だけのことではありません。教会を出てそれぞれが遣わされている場所に関わる1人1人との向き合い方の中で神様の姿になれるのか、自己中心な人になるのかで決まるのです。出合いは神様の摂理です。今日からは、出会う人を大切にしましょう。そしてその人と良い関係を保つために、まず自分が人格者になりましょう。人格者とは、神さまがつくった人格に戻ろうとする人です。人格は1人1人違います。だから1人1人に違った召し方が与えられています。その召し方を実行するために個性という人格が与えられているのです。それは霊を司る部分でありいのちの源です。「我々に似るように人間をつくらう」と神さまより少し劣るものとして私たちがつくられたのです。出合いによって過去の経験や記憶から塗りつけられた偽物の人格を変えていきましょう。

■ ② 自分を聖く保つ！！ コントロール。

聖く保つとはどういう事だと思いますか。罪を犯さない、聖別されることでしょうか。では、私たちの中で全く罪を犯さない人はいるのでしょうか。聖書には「神が聖くした」と書かれています。（エペソ 5:10～17、26:27）「機会を十分に生かして」「愚かにならないで、主のみこころは何であるかを、よく悟りなさい」とはどういうことでしょうか。これらは何のため、誰のためにでしょうか。私たちが聖さを保つ時、第3者が抜けてしまうと聖くある意味がありません。自分の救い、自分の聖さのために生きていたのでは意味がないのです。だから「機会を十分に生かして」なのです。エペソ5章には愛について書かれています。私たちクリスチャンは聖くあって嫌われていたのでは意味がありません。聖くあって愛される必要があります。機会を十分に生かすために聖くあれと言われています。イエスさまは聖くあって愛されてきました。イエスさまの香りを放つ、キリストの福音を伝えるために聖くありましょう。万次郎の影響を強く受けた新島襄にも次のようなエピソードがあります。多くのクリスチャンの影響を受け、命懸けで船に乗り込み渡りました。その時、多くの屈辱にあっていました。彼は元武士だったので屈辱に耐えかねた時もありました。その時言った言葉がこれです。「その時私は怒りが心頭に発し、復讐の念にかられて、私の日本刀を求めて自室に駆け込んだ。刀をつかみ、部屋から飛び出そうとした時、たちまちひとつの考えが湧いた。そのような行動をとる前によく考えなければならぬ、と。そこでベッドの上に腰をおろして、心の中に言った。これは取るに足らぬ事柄ではないか。恐らく私はこの先もときびしい試練に遭うことだろう。今ここでこれしきのものを忍ぶことができなければ、大試練にどうやって対処できようか？ 私は自分の辛抱のなさを恥じ、今後はどのようなことがあっても刀に手をかけまいと決意した」。新島襄は自分をコントロールしました。自分のおかれた場所で愛されていますか。新島襄のように自分をコントロールして神の聖さを保って多くの人に愛されて、神さまの福音、愛を伝えていきましょう。

■ ③ キリストと共に！！

キリストと共に生きると言うことは、彼の生き様を学ぶと言うことです。「信じます」と口で言っても行いがイエスさまを真似ようとしなければ無意味です。彼の姿に近づこうと努力しなければ意味がありません。困っている人がいればどんなに差別されている人であろうか遠回りをしてでも助けたではありませんか。自分に剣を振った人をいやしました。イエスさまになることは出来ません。でもそうありたいと自分を律し、失敗しても何度でも悔い改めて前進することが大切です。それは1人で行うものではありません。そのために教会が与えられています。

さいごに

みなさん、変わらしましょう！！ 決意は自分にしかできません。悪魔や他人が自分の人生を壊すわけではありません。自分の決断が自分の人生を決めるのです。そしてその自分の決断に神さまは祝福を与えてくださいます。だから私たちは聖くあろうと決意しましょう！！

(要約者:行司 佳世)